



中津川、恵那市特産の夏秋トマトの出荷が本格化するのを前に、夏秋トマトの目ぞろえ会が25日、中津川市茄子川のJAひがしみの中津川トマト選果場など2会場で行われた。生産者が出荷基準と新型コロナウイルス対策を確認した。
(青山和史)

トマトの出荷基準を確認する生産者ら＝中津川市茄子川、JAひがしみの中津川トマト選果場

中津川、恵那市で目ぞろえ会

夏秋トマト、出荷待つ 生産者が基準など確認

同JAによると、夏秋トマトの生産者は両市合わせて126人いる。今年の作付面積は18・6畝(前年比0・1畝増)、販売量は1823トを見込む。今月8日から選果場にトマトが持ち込まれており、来月から出荷が本格化する。また今年は生産者らでつくる東美濃夏秋トマト生産協議会が昨年12月に認証を受けた「県GAP」に基づく農場管理を徹底し、農場と選果場を行き来する出荷用コンテナを清潔に保ち、新型コロナウイルスの感染拡大で選果場が停止することを防止する。

目ぞろえ会ではJA全農岐阜の担当者らがトマトの販売状況や出荷体制などを説明し、色や形が違つトマトを手に取りながら出荷基準を確認した。中津川市夏秋とまと生産組合の三宅育雄組合長(同市阿木)は「作付けは順調に進んでいる。感染を防ぐために手洗いやコンテナの清掃をしっかりとやっていきたい」と話した。